

開会式

挨 捂

広島大学経済学部附属

地域経済研究センター長 機 本 功

今回は、海を渡りまして四国松山で開催させて頂くことになりました。皆様方にご協力頂きまして感謝申し上げると共に、大変光栄なこととお礼を申し上げます。

私どもの広島大学地域経済研究センターは平成元年に文部省の省令で設立されました。地域経済研究というテーマで活動するセンターはわが国で初めて出来上がったものであります。各大学に同じ名前を名のるセンターはたくさんありますが、これは大学内部での内々のセンターとして、文部省の省令で出来たものは私どもが初めてであります。従来こういうセンターは先ず東京大学にできて、次に京都大学にできてという順番がありまして、広島大学より古い大学はたくさんありますから、我々も広島大学にできるとは思っていませんでしたが、いきなり私どもの所に初めて出来ましたので、私どももびっくり致しました。

平成元年にできました時に二つの旗印と申しますか、キャッチフレーズを掲げて今日に至っております。一つは、地域は地域で考えるということです。従来私どもの広島などにおきましても、中央の大学の先生あるいはシンクタンクの方々に、中央側からご示唆を受けて、私どもの地域の将来展望を形成するという側面がありました。ですがやはり地域の課題等について一番詳しいのは地域の人々ですから、基本的には地域のことは先ず地域で考えることが必要であろうかと思います。勿論中央の大きなご助力は戴かなければなりませんが、しかし基本的には地域は地域で考えるべきであるというのを一つの旗印にさせて頂きました。そうは申しましても、私どものセンターは人員も少なく能力もあまりありませんから、いろんな方々のご協力を得たいということで、もう一つの旗印として産・官・学の連携ということを掲げました。お蔭さまで自治体の方々あるいは中央省庁の出先の方々のご協力を得ていますし、また産業界からも御支援やご協力を頂きました活動して参りました。

勿論、シンポジウムにしましてもいろんな研究集会にしましても従来は広島で開催して参りましたが、今回はかねがね私どものセンターで客員研究員としていつもご協力を賜っています愛媛大学の柏谷先生、それからしばしば私どもの研究集会にご出席頂きまして、いろんな貴重なご意見を賜っています（株）いよぎん地域経済研究センターの方々



が、こういう会は非常に面白いから松山でやってくれというお誘いを頂きまして、私どもは大変感激しまして今回こちらに参らせて頂いたところでございます。ご挨拶方々お礼を申し上げる次第です。本日及び明日もありますが、ご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

挨 拶

地域経済研究推進協議会会長
中国経済連合会専務理事 林 憲 弘

開会に先立ちまして主催者の一人として一言ご挨拶を申し上げます。

地域経済研究推進協議会は、先程櫻本先生からご紹介がありました。平成元年5月広島大学経済学部に地域経済研究センターが新設されたのを契機に、地域経済に関する研究活動を一層推進し、地域経済の活性化を図ることを目的として、平成2年3月に地元の産学官の方々にご参加頂きまして設立されました。この間、会員の皆様方の絶大なるご支援の下に、シンポジウム、研究集会、セミナー、あるいは研究会などいろいろな事業を、広島大学経済学部附属地域経済研究センターとの協賛で行ってまいりました。またこれらの行事の成果を報告書として刊行することによりまして、地域経済の活性化を図っているところあります。この度はお招きいただきまして、この地松山で開催をさせて頂くことになりました。四国経済連合会のご支援もいただきまして、今回の研究集会では、中国・四国地域の連携バージョン2というテーマの下で本日と明日の2日間にわたりまして、基調講演、討論会、研究報告をさせて頂くことになっております。現在私どもとしましても次期全国総合開発計画の策定に向けて鋭意取り組んでいるところであります。本日のこの研究集会を大変意義深いものと考えているところであります。

本日はこれから広島大学地域経済研究センター長の櫻本先生に「次期全総計画と中国・四国地域の連携」というテーマで基調講演をして頂きます。それからこの基調講演を受けまして引き続き愛媛大学の柏谷先生の司会の下に、御地松山からはダイキ(株)の大亀社長、それから(株)フジの東常務、広島からは中村角(株)の中村社長、松江からは合資会社一文字屋の景山社長、そして広島大学の櫻本先生、この5名の方々によりますパネル討論会を開催させていただきます。パネル討論の討論者の方々には大変ご多忙のところお出ましを頂きまして誠にありがとうございます。心からお礼を申し上げる次第であります。明日は中国・四国のシンクタンクにご出席頂きまして、午前午後にわたりまして6件の研究報告をして頂くことになっております。報告者はもとより座長ならびに討論者の方々には諸事ご多忙の中をお越し頂きまして心からお礼を申し上げます。今回の研究集会が地域の発展に寄与すると共に、ご出席の皆様方にとて意義あるものとなることを心から念願を致しているところであります。



最後に一言当協議会への入会のご案内をさせて頂きたいと思います。地域の産学官の方々のご協力によりまして、現在53団体の方々にご入会を頂いております。今後一層活動を活発に推進するためにより多くの皆様方にご入会頂きたいと存じております。よろしくご支援の程をお願いしたいと存じます。入会の手続き等につきましては、中国経済連合会の中に当協議会の事務局があります。どうぞそちらにお問い合わせを頂ければと思います。それではどうぞ最後までご静聴頂きますようお願い致しまして、私の挨拶とさせて頂きます。どうもありがとうございました。

挨 拶

四国経済連合会専務理事 前川 雅一

本日の研究集会が四国で初めて、当地松山に於いて開催されるにあたりまして、四国の経済団体として一言ご挨拶を申し上げます。

さて、中国地方と四国の交流の歴史を振り返ってみると、古来より海路によります活発な交流が行われておりましたが、明治以降は交通手段が海運から陸運に移つてまいりました為に、瀬戸内海は中国地方と四国を隔てる海となりまして、両地域の交流は次第に薄くなっています。しかし昭和63年の瀬戸大橋の開通によりまして、岡山・香川間にを中心に、通勤通学や買い物といったビジネスや生活面におきまして、人々の新たな交流は着実な広がりが見せてきています。因みに岡山・香川間のJRの年間旅客輸送量はすでに1千万人を越えています。架橋前の約2.5倍にあたるわけです。その内の16%位167万人の方が通勤・通学という形で、生活に根ざした交流ということになっているかと思います。瀬戸大橋の開通に引き続きまして、平成9年度から10年度にかけて、本四連絡橋、神戸・鳴門ルート並びに尾道・今治ルートが完成する見通しとなっていました、本格的な本・四三橋時代の幕開けを迎えようとしています。そうなりますと、瀬戸内海はもはや中国と四国を隔てる障害ではなく、両地域を結び付ける新たな舞台となって、中国各地と四国各地の交流も一段と活発化し、瀬戸内海を挟んだ広域的な経済文化圏の形成が期待されるところです。

更に現在、関係の自治体や経済団体が中心となって取り組んでいる太平洋新国土軸、また日本海国土軸、更には幾つかの地域連携軸が21世紀において構築されると、西日本としては地方同志が直接結びついた、より広域的な循環型の経済文化圏が形成され、その中で中国地方と四国は交流と連携の要として、お互いの機能を補いながら地域独自の創造力と企画力を發揮して、自立的で活力ある地域を築いていくことが期待されます。新たな国土軸や地域連携軸構想を推進する際に重要なことは、これらを単なる交通軸あるいは産業都市軸として捉えるのではなく、地域がこれまで培ってきた価値ある歴史と文化を国土形成に折り込んでいくことであると考えます。昨日私は四国の経済界の代表の方々と共に建設省に陳情に参りました。その際建設省の藤井事務次官がおっしゃつておられましたが、第1国土軸、かつての山陽道・東海道というのはどちらかというと経済軸であった。本四を繋ぐ太平洋新国土軸になると、もはや経済性だけでは説明がつ



かなくなって、社会軸というような考え方で考えるべきである。これから連携軸といふのは、歴史・文化も織り込んだ生活軸として捉えるべきであろうというようなお話を戴きました。そのようにおっしゃって頂いたことについて、私どもも同感であり非常に心強く思った次第です。

私ども経済連合会では、先月、坂出市の瀬戸大橋記念公園におきまして、中国・四国交流フェスティバルというのを開催致しました。中国地方からは米子がいな太鼓とか備中神楽といった伝統芸能を伝承している方々をお招きしまして、四国の皆様方にご披露頂くなど、中国と四国の歴史や文化面での交流につきましても、微力ながら取り組んでいるところです。最後になりましたが、2日間にわたります本研究集会におきまして、中国・四国各地からご参加の研究者並びに経済人の皆様方によりまして、活発且つ有意義な論議が展開されますと共に、これを契機に今後更に中国・四国両地域の交流・連携が深まりますことを祈念しまして私の挨拶とさせて頂きます。どうもありがとうございました。